『三宝絵詞』の用語と表現　再考

関　一雄

はじめに

筆者は、「『三宝絵詞』の用語と表現」と題した旧稿[注一]の冒頭で、渡辺実『平安朝文章史』（昭和五六〈一九八一〉年・東京大学出版会）[注二]第五節　解説の文章―三宝絵詞が、「総序」の一節「物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物也」を引用し、これが「当時の物語の姿であった。」としながらも、続けて次のように説明していることの一部分に疑義を呈した。

こうした仮名文の大きな流れの中で、いまその序を引いた「三宝絵詞」は、はなはだ異色のある存在であった。作者は源為憲と判明しており、成立が永観二年（九八四）と判明しており、この作品の受けとり手が冷泉院第二皇女尊子内親王と判明している、という点も特異だが、その内容は物語のような「海アマノ浮木ノ浮ヘタル事」ではなくて、「沢ノ末己毛ノ誠トナル」仏法への誘いであり、その文章もほとんど漢文訓読文に終始する、という点でも特異な位置を占めるものである。すなわち女性に受けとられるもの、と承知の上で書記された漢文訓読調の文章なのである。（傍線は筆者、以下の引用も同じ）

右の文章の傍線部で「ほとんど」という限定をつけながら、後続句にそれと重複するような「漢文訓読調の文章なのである」という記述があることについては、筆者は、これに先行する諸説の大勢を踏まえたものであるため、として大筋では渡辺説を肯定的に捉える論を発表した。

ただし、渡辺氏が論著中で〈注〉として言及した宮坂和江論文の

然し中巻は、話の素材や、出典の記録体文に影響されてか、最も訓読調から遠ざかってゐる。即ち言語的に、

1　接頭語「ウチ」「サシ」や接尾語「サマ」のついた微妙なニュアンスを表はす語彙は、中巻だけにしか見えない。

ウチオキツ、ウチシバラレテ等4

サシオキテ等2

ツレナサマ

「侍リ・給フ（下二）」による待遇意識の表現も中巻だけに見られる。（但総序に給フ1）

2　直訳的な語彙は中巻にだけ無かったり、又は特に少なかったりする傾向がある。

との指摘には、更なる検討を加える要があるとし、「中巻の表現は訓読調から遠ざかってゐる。」というより、和文に近いというべきであることを〔役行者〕〔橘磐嶋〕〔大安寺榮好〕〔衣縫伴造義通〕〔吉野山寺僧〕の話の中に用いられた登場人物の動き（演技）を表す動詞に注目して論述した。

一　旧稿の考え方自体の根本的修正

前掲の渡辺氏の「こうした仮名文の大きな流れの中で、……」の「こうした」は、それ以前の昔物語『竹取物語』から『宇津保物語』『落窪物語』などについて、「（それらの物語の）表現は、漢文訓読調を洗い落とす方向で磨かれて行った。」と述べ、他方、「散佚物語の数々についてはよくわからないけれども、」と続けたところで、『三宝絵詞』の「総序」の一節「物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物也」を引用し、これが「当時の物語の姿であった。」と結論づけていく、このような文脈の流れの中での「こうした」なのである。

本稿はこのような考え方、すなわち『竹取物語』などが「漢文訓読調」であるという説明自体を疑うものである。

そこで、渡辺実『平安朝文章史』第一節　かな文の出で来はじめ――竹取物語　の記述の問題点を逐一挙げてコメントすることとする。

渡辺氏は、『竹取物語』の冒頭部分

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、讃岐の造となむいひける。その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、うつくしうて居たり。

を引用した後に、「という発端部からして、甚だしく漢文訓読文的である。その理由はいろいろあるが、まず文が短く切れること、であろう。」と言う。そして、「最も典型的な和文とみなされるやや後の女流の筆によるならば、このような短文をつみ重ねる替わりに、」と述べ、次のような書き換えを提示している。

むかし、讃岐の造とて翁ありけり。野山に出でて竹を取

りつつ、よろづのことに使ひければ、世には、竹取の翁とぞ言ひける。翁、ひと日竹伐らむとするに、本光る竹の一筋ありけるを、あやしみ寄りて見れば、筒の中光りとほりて、三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。

と書き換え、

更に、翁の会話の部分にも触れて、

翁言ふやう、

「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なんめり」

とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。

の部分も、前述と同様に、「女流の筆によるならば」と断り、

翁、「朝夕に見る竹の中におはすればわが子になり給ふべき人ならむ」とて、

手にうち入れて抱き帰りて、養ひおほす。

となるとし、続く地の文も、

とでも書くのではあるまいか、とする。

しかし、このように書き換えたのでは、『竹取物語』の作者が意図した表現が全く死んでしまうのである。

詳細は、筆者の既発表の論著、「『竹取物語』の用語と表現―「敬語」「和文語」「漢文訓読語」をめぐって―」(注三)『平安物語の動画的表現と役柄語』(注四)を参照いただきたいが、ここで簡単に『竹取物語』の表現を解説すると、まず「竹取の翁といふもの」という言い方で、読者（聴者）の十分には知り得ていない下賤の生業にたずさわるものを紹介し、次に「名をば、讃岐の造となむいひける」と実名を言う。実名を言うことによって、この昔の物語は本当にあったことなのだ、という作者の苦心の表現となる。さらに、翁の動作が「野山にまじりて竹を取りつつ」「あやしがりて、寄りて見るに」によって、生き生きと描き出されているのである。傍線部「まじりて」は〈分ケ入ッテ、動キ回ッテ〉、「あやしがりて」は〈ハテナ？ト首ヲカシゲテ〉というように、登場人物翁を芝居の役者に見立て、その演技を活写していると見るのでなければ、作者の意図に沿わないものとなる。

更に、翁の会話は、「知りぬ。」と一旦切って、〈分カッタ！〉と手を叩く動作を暗示し、「子になり給ふべき」で、「子＝籠(こ)」という洒落が生きてくるのである。

このように考えると、「漢文訓読文（調）」「和文」という従来からの術語による説明では、不十分というより適切ではなく、術語の名称と実体についても、再検討されなければならないであろう。

二　渡辺説の記述の飛躍

渡辺氏の達意の文は読者を捉え魅了するものがあるが、一方で一つひとつの語句（術語）に拘って読むと、素直に従えない記述

の飛躍が見られる。

氏は先にも引用した通り、「漢文訓読調の文章なのである」として、上巻の九話「鹿王」の冒頭をかなり長く引用した後に、続けて「悲ビヲ成シテ申サク「……」ト申ス。不知ザリツ、……ヲバ　などの言いまわしや、王ハ常ニ鮮ナルヲ用チキ、吾レハ暫ク命ヲ延ベム。のような漢文風の対句形式、（略）などを見るだけで（漢文訓読調であることは）明らかである。」と述べた後に、次のように続ける。

著者の為憲は、天禄三年の歌合に見られるように、和文を書こうと思えば書けたはずなのだが、尊子内親王という女性を受けとり手とする文章をこのような反和文的な文章で書いたことについては、物語などと違って「誠なる」内容のものだから、とするのが当っていようが、それが絵詞である、ということも考えに入れなければならないのかも知れない。つまり尊子内親王が直接目にされるのは絵の方であって、絵詞は、誰かによって語られるべき説明の、その台本のごときものであったかも知れない、ということである。もっと具体的に言えば、これを台本として語られる尊子内親王の耳に入って来る言葉は、例えば

かたへの鹿の王、悲しみにたへで、人の王の御前にまゐりつつ……のような、和化したものであったかも知れない、ということである。

同書の『竹取物語』の「漢文訓読調」を、和文に書き直したところに見られるように、渡辺氏の達文は、論文というより、極言すれば自由奔放な随筆に近い。まず、傍線部「反和文的な文章」という語句は、「漢文訓読調の文章」と同義と見ていいのか躊躇されるが、この文脈からして同義と見なすことにすると、それが「物語などと違って「誠なる」内容のもの」だからなのか。すると「『竹取物語』の「漢文訓読調」」も「「誠なる」内容のもの」なのか。更には後続の傍線部「その台本のごときものであったかも知れない」という推量表現が繰り返されるのにも論文らしからぬものを感じてしまう。

右に、〈自由奔放な随筆に近い〉と非礼な言い方をしたが、別の言い方をすれば、これほどの言を弄さなければ、尊子内親王に「漢文訓読調」の『三宝絵詞』を呈したことの説明が充分にならない、ということにもなる。

氏は、本節（第五節　解説の文章――三宝絵詞）の〈注〉の部分で、次のように付記される。

漢文訓読については、本節に限らず築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（昭和38年、東京大学出版会）に依存する。

『平安朝文章史』は、冒頭にも記したように、昭和五六年であるから、それから二〇年を経ずして書かれた本書の記述が築島説に「依存」したのは、やむをえなかったからとも考えられよう。しかし、上記のような問題点を考えていくと、築島説に疑問が及ぶことになってもおかしくない。

築島氏の三宝絵詞に関する説は、『訓点語彙集成』第一巻（平成一九〈二〇〇七〉年）の「訓点語彙総観」に見られるので、後で触れる。

次に旧稿で述べたことと重複するが、三宝絵詞の文章が「漢文訓読調」と断定できないことを、再述する。

中巻には草仮名表記によるいわゆる「東大寺切」[注五]が存しており、旧稿に記したごとく、これについても諸論文が発表されているが、この「東大寺切」が受けとり手の尊子内親王に献上された原本に最も近いものであろうというのが、諸説のほぼ一致するところのようである。とすると、序・上巻・下巻と相違し、中巻が、先に述べたように、「訓読調から遠ざかってゐる。」というより、和文に近いことの理由について、検討を加えなければならない。

三　中巻の「和文語」動詞に関わる補説

旧稿で、「和文語」動詞という筆者の造語による術語を用いて説明したが、この動詞は、物語に登場する人物の言動（仕草）を言葉（という絵の具）によって視覚化し、その動きを表現する中核になるもので、語り手がこれを用いることによって、動画的表現が成立する。心中の動作を表す時には「思ひ嘆く」の如く「思ひ――」型の複合動詞をもってする（単独の「嘆く」は、〈溜メ息ヲツク〉と現代語訳されるように目に写る動作を表している）。あるいは、感情形容詞を用いてその人物の感情を表現する。会話文・心理文などといわれるものも、語り手が登場人物に成り代わって、物語中で発言したり、思いに耽ったりするものであると説明できる。

次に東寺観智院の〔二、役行者〕の一節を再度引用し、補足説明する。[注六]

○行者諸ノ鬼神ヲメシツカヒテ水ヲクマセ、薪ヲトラシム。是ニシタガハヌ物ナシ。アマタノ鬼神ヲメシテ云、「葛城山ト金峯山トニ橋ヲツクリワタセ。我カヨフミチニセム。」トイフ。諸ノ神ドモ愁テナゲヽドモ、ユルサズ。セタメヲホスルニ、思ワビテ「ヒルハ形ミニクシ。」トテ「ヨルニカクレテツクリワタサム」ト云テヨル〳〵イソギツクルアヒダ行者葛木ノ一言主乃神ヲメシトラヘテ、「ナニノハヅカシキコトカアラム、形ヲカクスベカラズ、スベテハナツクリソ。」トハラダチテ咒ヲモチテ神ヲシバリテ谷ノソコニウチヲキツ。

「メシツカフ」「ナゲク」「イソギツクル」「メシトラフ」「ハラダツ」は、行者・鬼神の目に写る動作、すなわち動画的表現となっている。「思（ヒ）ワブ」は、鬼神の心中の動作を表し、続く鬼神の会話を引き出す。

引用文最後の「ウチオキツ」は、宮坂論文で指摘されたものだが、「ウチ」動作の発生をマークする接頭語で、〈ポイト投ゲ置イタ〉という動作を極めて視覚的（動画的）に表現しているのである。一方で、「水ヲクマセ」「薪ヲトラシム」「シタガハヌ」など、助動詞は和文語・漢文訓読語を、混用している。

東大寺切の対応箇所は、

行者よるおに神をめしつかひて水をくませ、たきゞをこらしむ。したがはぬものなし。あまたの鬼神にいはく、「かつらきの山とかねのみたけとにはしをつくりわたせ。わがゝよひみちにせん。」といふ。神どもうれへなげゝどもゆるさず。せめおほすればわびて、おほ□なるいはをゝはこ（以下欠ク）

とあって、後半部分を欠いているが、助動詞の箇所は同じである。

旧稿で取り上げた〔橘磐嶋〕（東大寺切・前田家本では楢磐嶋）以下は、本文の引用は省略し、話の中身と視覚化する動詞の用法を説明する。「橘磐嶋」では、磐嶋が寺から融資を受けて商売に出掛けるが、旅先で病気になって馬で帰る途中、人が追って来ているのに気付いて、振り返る（「見カヘル」）と、それは三人の男であって「オイツカ」れた後は、並んで行くという場面がある。「オヒツク」「ソヒテユク」（東大寺切では「そひゆく」）は、三人の男と磐嶋の動作を動画的に表現している。実は、この三人の男は現世の人・動物を冥土に連れて行くことを担当する鬼たちであったのだが、磐嶋の家で大変に饗応されて牛まで食わせてもらったため、磐嶋を死なせるのは忍びなくなり、その代わりの人を死なせようということになる。そこで、磐嶋と同じ年に生まれた人を知らないか、と鬼が尋ねたのに対し、磐嶋が知らないと答えたところに、別の鬼が「タチカヘリ」テ、自分が知っているからそのようにしよう、その代わりに有り難いお経をあげてくれ、と持ち掛けるのである。観智院本の「タチカヘル」は東大寺切では、「たばかる」となっているが、これでは鬼達の動き回る動作の視覚化表現（動画的表現）としては物足りない。「タチカヘル」は「帰る」動作の敏速に行われることを表すのである。(注七) 助詞・助動詞については、観智院本は、ナム・セ（ス）が「役行者」のものと同じく用いられるが、東大寺切では後者が「しめ（しむ）」で、漢文訓読語の使用となっている。

〔大安寺榮好〕では、僧榮好の亡き後、その弟子の童が榮好の母親に息子の死をひた隠しにして、故榮好が昵懇にしていた僧勤

操にすがって食物を与えている場面がある。「ツレナサマ」は、童の平静を装う様子を表す語であり、「サシオク」は亡き師の母の前に食物を置く動作であるが、「サシ出ヅ」が、〝ある特定の人の前に、物事をさし出す〟という動作を表す用例があるのと同じく、この場合も〝母の前に〟の意味を含む「サシオク」であるとも考えられそうである。話の後半、その母が息子の死を知ったショックで死んだ直後の場面では、童の悲しむ動作を「カナシガル」で表している。このような「―がる」動詞については後述する。

〔衣縫伴造義通〕では、重い病に罹った義通が禪師に有り難いお経を読んでもらうと、聞こえなかった耳が聴こえるようになり、病が治ったという話が人々の間で評判になって、禪師を尊敬する。その箇所で觀智院本は「タウトガル」を用いている。一方東大寺切は「あやしまず」としている。この相違についても後述する。

〔吉野山寺僧〕では、体力の衰えた師の僧に食べさせるために、童子が新鮮な魚を櫃に入れて寺に帰る途中、在俗の者にあやしまれて、櫃を開けさせられるが、魚は經に化している。これを見て、俗の恐れ不思議がる動作が「ヲソレアヤシガル」で表現されているのである。

〔大安寺榮好〕の「カナシガル」、〔衣縫伴造義通〕の「タフトガル」とこの例とに共通しているのは、それぞれの登場人物（役者）の悲しい・尊い・怪しい　と思う気持ちを動作に表していることである。物語の登場人物の動作をカナシブ（ム）・タフトブ（ム）・アヤシブ（ム）のような心理動作語で表しても意味は通ずるが、「―がる」動詞を用いることによって、前述のウチー・タチー・サシー等の動詞と同じく、多彩な登場人物達の動きを目に写るように表現する、視覚化する・動画的に表現するという描写法が、特に中巻では発達しているといえよう。

さて筆者は、旧稿で觀智院本と東大寺切のどちらが和文の性格が強いかについては、必ずしも明確な結論は出しにくい問題のように思われる、と記した。

旧稿で述べたごとく、春日和男論文では、構文・用語の両面から詳細に検討を加え、結論としては中巻の両本を比較すると、東大寺切の方が和文的表現が多いとした。増成冨久子論文もこの点は一致しており、更に觀智院本について、「（東大寺切のような）草仮名本から転写されるにあたって、僧の手を経ていると考えられる。そして、その際当時盛んであった漢文訓読語的性格を帯びたものに変わっていったと考える。また、読み手も、尊子内親王という姫君に限定されたものではなくなって、やはり仏教界に身を置く人々及び仏教に深い関心を抱く人々へと変わって行ったと考える。」とする、かなり大胆な結論を示している。

しかしながら、本稿で引用した〔橘磐嶋〕で指摘した通り、觀智院本が「ヨマセタテマツレ」とあるところが、東大寺切では

「よましめたてまつれ」とあり、「衣縫伴造義通」では觀智院本「タウトガル」に対し、東大寺切は「あやしまず」とあって、東大寺切の方が漢文訓読語を用いているとも言える箇所もある。また、〔橘磐嶋〕では觀智院本「タチカヘルテ」の方が東大寺切「たばかりて」よりも物語用語としてふさわしい。問題は、仮名文に類するとされる東大寺切が「和文的表現が多い」とか、漢字片仮名交じり文の觀智院本が「漢文訓読語的性格を帯びている」というような説明は、これまでの研究として一定の評価はなされようが、前述したように今後は「和文語」「漢文訓読語」という術語をキーワードとする説明だけでは、不十分であり、不適切な場合もあると言えるであろう。

「和文語」「漢文訓読語」という術語は、今更いうまでもなく、渡辺氏が「依存」したとされる築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』により学界に流布したものである。

築島氏は、『訓点語彙集成』第一巻「訓点語彙総観」の末尾近くに、村上天皇第十皇女選子内親王撰の『発心和歌集』寛弘九（一〇一二）年の中の和歌の、

ゐひのうちにかけしころものたま〳〵もむかしのともにあひてこそしれ

いさぎよきひとのみちにもいりぬればむろのちりにもけがれざりけれ

まれらなるのりをきゝつるみちしあればうきをかぎりとおもひぬるかな

ひとめにてたのみかけつるうきゝにはのりはつるべきこゝちやはする

を挙げられ、傍線部の「たま〳〵」「いさぎよき」「まれら」「うきゝ」は、「これらは何れも訓点特有の語彙と認められる。」とし、

平仮名書の「物語」に伍して、『三宝絵詞』が存在し、若年の女性貴族に読まれたことは、訓点語彙がこれらの女性達にとって、日記や物語などの表現には用ゐないにしても、理解の範囲の中にはあった言語であることを示してゐると思はれるが、『発心和歌集』の存在は、更に進んで、彼女等の「表現」語彙の中にも、或る程度の領域を占めてゐたことを推定させる。清少納言や紫式部は、恐らくこの事実を体得してゐて、『枕草子』や『源氏物語』の中では、漢文の訓読文の忠実な引用の形だけに限定し、漢文の訓読の語彙を他の部分から峻別して、一方では和文の純粋性を確保し、他方では漢文訓読の独自性を際立たせることに成功したと見ることが出来るであらう。（傍線は筆者）

と、説明する。『三宝絵詞』は、尊子内親王にとって「理解の範囲の中にはあった言語」であり、『発心和歌集』は選子内親王の「表現」語彙の中」の語であるとするのは、渡辺説と比すると、簡単に過ぎると言ってよいのではないか。

そして、傍線部の「『源氏物語』の中では、漢文の訓読文の忠実な引用の形だけに限定し、」とされるのも、筆者からすると、限定し過ぎである。

『源氏物語』で、漢文訓読語が登場人物の会話に使われた代表的な例は、少女巻で、夕霧の大学進学の儀式の「字つくる」儀の場面である。

「東の院」に舞台が設定され、登場人物「上達部、殿上人」の紹介がなされる。「博士」の登場は、分かり切ったこととして殊更に書かれず、次の文の直前に「臆しぬべし」と語り手のコメントがなされている。それによって次の「咎め出でつゝをろす」の動作者は、「博士」であることが暗示され、続いてその会話が飛び出すのである。

右大将、民部卿などの、おほな〳〵土器取り給へるを、あさましく咎め出でつゝをろす。「おほし垣下あるじ、はなはだ非常に侍りたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけに仕うまつりたうぶ。はなはだおこなり」など言ふに、人〻みなほころびて笑ひぬれば、また、「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだ非常也。座を退きて立ちたうびなん」など、をどし言ふもおかし。

この一節の博士の会話中で繰り返される「はなはだ」は、「おほし」「非常に」ともに「漢文訓読調で、儒者らしい言いまわし」（本文の引用に用いた「新日本古典文学大系」の脚注）と説明され、管見では、他の注釈類もほぼ同じであるが、「博士」が、日常的にこのような会話語を用いていたとは、単純には考えにくい。詳しくは（注四）の拙著を参照いただきたい。

しかし、ここで述べたいことは、選子内親王撰の『発心和歌集』の和歌での漢文訓読語の使用よりも注目すべきは、『賀茂保憲女集序』の散文での使用である。既に本誌の前号（注八）で述べたので、ここではその本文の一部を引用する。

しきしまの世中、わがみかどの御しぞく、くにのうちのつかさ、ちぢのかどすぎにしとしごろ、ならへる月日のなかにもとむれど、我が身のごとかなしきひとはなかりけり、としのつもるままに物おもひしげりけるときに、おもひけるやう、はかないとりといへど、むまるるよりかひあるは、すだつことひさしからず、はかないむしといへど、ときにつけてこゑをとなへ身をかへぬなし、かかれば、とりむしにおとり、木におよぶべからず、くさにだにひとしからず、いはんやひとにならばず、ちはやぶる神代より、ひとをばかしこきものにしけるぞ、そらをとぶとりといへども、みづにあそぶいをといへども、はりをまうけ、いとをすげて、そのまなこをとぢて、ふかきうみといへど、きをくぼめ、かぢをまうけて、おのづからわたりぬ、すべてかぞへば、はまのまさごも

つきぬべう、たごのうらなみもかずしりぬべうなむ、をとこをんな、さまにしたがひ、あけの衣としごとにいろまさり、つたなきまつにすむたづは、みのころもとしふれどいろをかへず、のぞみはふかけれど、たにのそこに身をしづむることをなげき、あるは世をそむき、のりにおもむいてこころをふかき山にいれて、みのをかけていしのたたみに身をかけて、こけのころも、きのはをつきにして、まつのはをくふ、これはよはひをたもつとききたり、……

〔『新編国歌大観』による。〕

ここには、一重傍線を付した音便形と、二重傍線を付した漢文訓読語が混用されている。これは、前号の拙論で述べた考えを繰り返すことになるが、賀茂保憲女が、自己の思いを日常的用語を用いて書いた文章と捉えてよいのではないか。偶然ではあるが、天野紀代子「仮名ぶみによる評論―『賀茂保憲女集』序文(注九)―」が前号の拙論と同時期に発表された。この論文には、漢文訓読語・和文語といった国語学者が拘る術語は一切用いていない。筆者はこの序文に関する限り天野論文の論述の仕方は正解であると考える。『源氏物語』以前の昔物語・日記等の仮名文に関しては、前述してきたように漢文訓読語・和文語という術語は揚棄し、前者は、会話文においては役柄語、地の文においては動画的表現をなす用語という考え方を繰り返し提言したい。

（注一）山口大学文学会志第四十八巻（平成九〈一九九七〉年）

（注二）ちくま学芸文庫（平成一二〈二〇〇〇〉年）として再刊された。

（注三）『筑紫語学論叢』平成一三〈二〇〇一〉年所収。

（注四）平成二一〈二〇〇九〉年　笠間書院

（注五）『諸本対照三宝絵集成』にならい、旧関戸家本（名古屋市博物館本）を含む。

（注六）テキストは、『諸本対照三宝絵集成』によるが、句読点・濁点・引用符等を付する。

（注七）拙著『平安時代和文語の研究』笠間書院（平成五〈一九九三〉年第一部第五章

（注八）「賀茂保憲女集序文の語彙と築島裕説」（日本文学研究第四八号〈平成二五年・二〇一三〉年）

（注九）「国語と国文学」（平成二五〈二〇一三〉年二月号）